

総合人文科学研究センター研究部門

「社会の複雑化・階層化の史的パースペクティブ」研究部門後援

公開シンポジウム

「関東甲信越地方における中期/後期変動期—4.3ka イベントに関する考古学的現象—」

主催：東北芸工大学公開シンポジウム『関東甲信越
地方における中期/後期変動期』実行委員会

共催：早稲田大学先史考古学研究所

日時：2013 年 4 月 27 日（土）13：00～18：00

2013 年 4 月 28 日（日） 9：00～16：00

会場：早稲田大学戸山キャンパス 36 号館 362 教室

この度開催された公開シンポジウム「関東甲信越地方における中期/後期変動期—4.3ka イベントに関する考古学的現象—」は、2 日間にわたり発表者 8 名と 200 名を超える参加者（27 日：134 名、28 日：77 名、合計 211 名）を得て開催された。

開催にあたり共催者の高橋龍三郎氏の挨拶があり、続いて主催者の安斎正人氏からシンポジウムの趣旨説明がなされた。それを受けて 27 日は自然環境史の 2 本の発表（工藤雄一郎氏、吉川昌伸氏）と縄文時代中期から後期の土器群の様相について発表があった（千葉毅氏、加納実氏）。翌 28 日は中期から後期の土器型式変遷に関する 4 名の発表があった。信越地方における大木系要素の問題（水沢教子氏）、関東地方における称名寺式と加曾利 E V 式の関係性（鈴木徳雄氏）、中部高地における中期/後期の型式変遷（綿田弘実氏）、北陸気屋式の位置づけ（木下哲夫氏）など、土器型式に関する発表が相次いだ。

今回のシンポジウムでは、工藤・吉川氏が自然環境史の立場から新たな知見を披露し、4.3ka イベントに係る谷筋や台地斜面の木本花粉の変化や具体的な植物利用の実態が報告



された。堅果類利用に関して後期以後、クリが減少してトチノキが増加するなどの現象に対して、その背景を巡って質疑応答と意見交換がなされた。

土器型式に関する質疑応答と意見交換では、主に称名寺式の細分と地理的分布、加曾利 E 式系土器の併行関係について、関東・中部地方などの実態が伝えられた。

シンポジウムの総括として山本暉久

氏・高橋龍三郎氏からコメントが寄せられ、近藤二郎氏による閉会の挨拶をもって終了した。

ボンド・イベントと称される完新世の気候変動のうち、今回は 4.3ka イベントに焦点を合わせ、土器型式の変化などの人文社会現象と気候変動がどのように関連するのかを主課題に据えた。両者を巡る整合性の把握と摺りあわせが、あらためて大きくて重要な課題であることが再確認された。



(文責 高橋龍三郎)